

かぶりつき工場取材



人気モデルが生まれるためには、魅力的なデザインに加えて、それを具現化する技術力が欠かせない。日本の眼鏡加工技術は世界トップレベルと称され、各国ブランドが製造を依頼している。今回はトップブランドにフォーカスを当て、日本最大の眼鏡産地、福井の工場を徹底取材！

岡田ソチ(本誌)撮影・藤井たかの構成取材文

人気モデルの作り方

Kazuo Kawasaki
KEN OKUYAMA EYES
MUGE-CLASSIC

Kazuo Kawasaki 「MP-100」の超軽量フレームは若手&ベテラン職人の「チーム制」から生まれる



①0.6mm厚のβチタンをコンピュータ制御されたマシンでレーザーカットし、フロントを作る。②レーザーカットで残った細かい屑を職人の手仕事で丁寧に削り取る。③研磨材と一緒にパーツを回転させて表面にツヤを出すガラ磨き。④平らなフロントをプレスで曲げてヒンジ部分を作る。⑤クリングスなどの小さな金属パーツをロウ付け。⑥最終工程の組み立てと検品のチームは10人前後。中央はフロアサポーターの野中道明さんだ。

デザイナー川崎さんも信頼
「髪の毛」本分ほどの微妙な調整もすぐ対応し、修正することができる。一貫して生産管理することで見た目印象だけでなく、掛け心地とバランスを考えた機能的な眼鏡ができるのです！」

ココに注目せよ！

0.6mm厚のβチタンでわずか4.5g ふんわり軽い掛け心地を実現



モダン

チタン×シリコンで調整しやすく柔らかかに耳に掛かる曲げ部分はチタンの丸棒材を使用しているため調整しやすい。シリコン製のモダンも適度な柔らかさで、滑り止め効果も。

ブリッジ

アクセントとなる90度曲げブリッジ
上面のみが黒色のブリッジはフロントをプレスで90度曲げて作る。デザイン的に優れている上に、フレームの強度も増す。

テンプル

見た目よし、機能よし
中抜きテンブル
βチタンを中抜き加工したテンブルは、見た目のアクセントになり、軽量化にも一役買っている。驚くほど軽くふんわりした掛け心地。

ヒンジ

レンズへの負荷を逃がし
顔幅の調整もできる
中抜き加工のヒンジが掛け外し時にレンズに掛かる力を逃がす。ウェーブの曲げの効果でフィッティング時に顔幅の調整も可能だ。

パッド

βチタンの金具で調整しやすい！
クリングスパッドは柔らかいβチタンの丸棒材をロウ付け。これにより調整しやすくなり、最適なフィッティングが可能となる。

Kazuo Kawasaki 「MP-100」ってどんな眼鏡？ 驚きの軽さを実現した現代的ラウンド

川崎和男氏によるストリングリムシリーズの最新進化モデル。レトロなラウンドが0.6mm厚のβチタンシートにより現代的なデザインに。従来モデルより約20%計量化を実現し、わずか4.5gという軽さ。強度も約2.5倍アップ。2万4150円。◎MASUNAGA1905青山☎03-3403-1905

福井眼鏡の祖にして名門

豪雪地帯である福井に確固たる地場産業を築くため、1905年に増永五左衛門が大阪や東京から眼鏡職人を呼んで創業する。チーム編成で職人職を確保し、腕利き眼鏡職人をこの地に輩出させた福井眼鏡の祖であり、名門である。

どんな工場？



眼鏡産業が、公衆化により高度な専門技術を生んだのは事実だが、反面、ひとつの工程で問題が出ると、次工程がストップするリスクも。「一貫生産なら何か問題が起きた時もすぐに対応ができます」(マーケティング室・増永暁子さん) また、かつて増永眼鏡は「ギルド制」にも似た職制を取り入れ、親方の元、徒弟制度で職人を育ててきた。その名残は今も残っている。工程別に10人前後のチームを編成、いちばん上は課長、その下にフロアサポーター、その下に職人という具合。ベテランから若手へしっかりと技術が受け継がれるだけでなく、仕上がった部品の状態が悪ければ前工程に戻して調整することも可能。職人一丸となつてわずかな誤差も見逃さない体制だ。「特別なことはやってないんです」と増永暁子さんは謙遜する。しかし、チーム制による行き届いた品質管理こそ、最終的なクオリティを決定づける。そこに川崎和男氏は全信頼を寄せているのだ。

わずかな誤差も見逃さない
職人一丸のチームプレイ

伝統工芸品から家電やロボット、人工臓器まで幅広いデザイン活動を行い世界的に活躍するプロダクト・デザイナー川崎和男氏、そんな川崎氏による眼鏡ブランドKazuo Kawasakiのなかでも、ステンレスを弦のように仕立て、レンズシェイプを美しく、かつフレームを軽量化させた「ストリングリム」は人気のシリーズだ。今回は4・5gの超軽量を実現したストリングリムの新作「MP100」に注目。最少のパーツ数で機能性と存在感を表現する。という川崎氏の設計思想を具現化するのには、並大抵のことではないはずだ。訪れたのは増永眼鏡である。眼鏡通なら、なるほど、どうですか？ 実は増永眼鏡は2010年余りに福井に眼鏡産業の礎を築いた全社で、その技術力は業界随一といえる。「MP100」は0.6mm厚のβチタンシートをレーザーカットし、切断面の屑などを削った後、ガラ磨きやプレス、ロウ付け、塗装、組み立てなどを経て完成する。これらの工程は福井の眼鏡作りでは珍しくないが、同社では全工程を通じて「一貫生産」している。福井の眼